

「お豆腐狂言」で人気の茂山千五郎家による狂言会を、昨年に引き続き今年も開催します。ユーモアに富んだ喜劇・狂言を前説付きで上演するので、狂言を初めて観る方でも心から楽しんでいただけます。文化創造館で楽しむ、狂言の「和らい」にご期待ください。

「お豆腐狂言」とは

茂山千五郎家は、江戸初期から約400年にわたり、京都を中心に息づいてきた大蔵流狂言師の家です。茂山千五郎家の狂言は、「お豆腐狂言」と称されます。その由来は、二世千作が、当時は一部の特別な階層の人々だけのものであった狂言を、地蔵盆・結婚式・お祝いの会など、色々な所に出向いて演じ、仲間内から「お豆腐のような奴だ」と評されたことによります。それに対して二世千作は「お豆腐で結構。それ自体高価でも上等でもないが、味つけによって高級な味にもなれば、庶民の味にもなる。お豆腐のようにどんな所でも喜んでいただける狂言を演じればよい。より美味しいお豆腐になることに努力すればよい。」と、悪口を逆手に取りました。それ以来、茂山千五郎家では家訓としてこれを語り伝え、いつの世も広く愛される、飽きのこない、そして味わい深い「お豆腐狂言」を広めていきたいと活動を続けています。

あらすじ・解説

柿山伏

出羽の羽黒山の山伏が大峰山で修行して帰る途中、お腹がすいたため、道端の柿の木に登って無断で柿を食べているところへ、畑主が見回りにやってきます。それを見つけて腹を立てた畑主は、木のかげに隠れた山伏をからかってやろうと、わざと「あれは鳥だ」「猿だ」と声に出します。正体がばれないように山伏は、そのたびに鳴き声を真似しますが、「あれは鶯だ、鶯ならば羽を伸ばして鳴くものだが、鳴かないのなら人であろう」と言われ、とうとう畑主へのせられ鶯の鳴き真似をしながら木の上から飛びおりてしまいますが・・・。

狂言とは便利なもので、何でもあるつもりで演技をします。そのつもりの演技が十分に発揮されている狂言の一つです。

濯ぎ川

嫁と姑に毎日用事を言いつけられる気の弱い男。この日も裏の川で洗濯をしている途中に、次々に用事を言いつけられます。男はあまりに用事が多いので、紙に書き付け、書いてないことはしなくてよいという約束を取り付けます。その後、男がとったささやかな反抗とは・・・。

フランス中世のファルス(笑劇)の「洗濯桶」をヒントに劇作家の飯沢匡さんが作られた新作狂言で、上演回数も多い人気狂言です。

縄綱

博打好きの主人が負けに負けて、借金のかたに太郎冠者まで取られることになります。主人は太郎冠者に事情を伝えず、手紙を持たせて博打相手の何某の所に使いにやります。先方に着いた太郎冠者は、ここではじめて真相を知ってつむじを曲げ、何を命じられても理屈を付けて全くやろうとしません。困った何某は主人に相談に行きます。主人は一旦太郎冠者をこちらに戻して、本当の働きぶりを見せることにします。主人のもとへ帰れると聞いた太郎冠者は大喜びで帰宅し、主人に命じられるままに縄を綱います。縄を綱いながら、喜々として何某の家の悪口をしゃべる太郎冠者。その間に縄の端を持っていた主人が何某に入れ替わるのにも気づかず・・・。

太郎冠者が縄を綱いながら身振りや物真似をまじえて話をする部分がシテの独演となっていて見どころです。

この事業は、「東大阪市第3次文化政策ビジョン：①文化芸術に親しむ環境づくり(東大阪市文化芸術振興条例第8条)」に基づき実施しています。



東大阪市文化創造館
HIGASHIOSAKA Cultural Creation Hall

アクセス

近鉄奈良線 八戸ノ里駅 北約200m(徒歩約5分)

※駐車場(有料)には限りがありますので、公共交通機関をご利用ください。

お問い合わせ・託児サービス申し込み

〒577-0034 東大阪市御厨南二丁目3番4号

TEL: 06-4307-5772 (受付時間: 9時~20時)

休館日: 第2火曜日

